

Hideki Masutani, Die Wiener Revolution 1984 im Spiegel der Flugblätter (Japanisch), 1987

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9882

書評

増谷英樹著『ビラの中の革命——ウ

イーン・一八四八年』

(東京大学出版会、一九八七年)

野村真理

われわれの世界史認識において、西欧型の歴史展開およびその到達点としての西欧の近代市民社会の価値觀は、久しいあいだひとつの規範であった。だが近年では、その規範の世界史的普遍性に疑問が投げかけられ、それを相対化しようとする試みがさまざまなかつていている。ウイーン一八四八年革命を民衆史の立場から再検討する増谷英樹氏の労作『ビラの中の革命——ウイーン・一八四八年』(東京大学出版会、一九八七年)もまた、今日の出来合の西欧近代社会像の解体をはかるものであり、その作業をつうじて著者は、われわれ現代を生きる者にたいして近代がもつた意味の再考をうながしている。本書の内

容に立ち入る前に、最近の近代史研究において本書がどのような位置づけられるか、著者の意をくみつつ、筆者なりに整理しておきたい。

西欧の近代市民社会を到達点とする圖式化された世界史認識の批判は、とりわけ一九七〇年代以降、西欧の外側からも内側からも意識的に進められた。まず外側からの批判についていえば、それは、「西欧の近代」がアジア、アフリカ、ラテンアメリカ等の第三世界で繰りひろげた文化的、社会的、経済的破壊行為の告発と、それを正当化したイデオロギーの暴露として開始される。一九七八年に刊行されるや多大な反響を呼び起し、昨年邦訳が刊行されるによんで新たに日本の一般読者の関心をも集めているエドワード・W・ザイードの『オリエンタリズム』(Edward W. Said, *Orientalism*, New York 1978, 板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、一九八六年)は、そのような西欧の文化帝国主義批判の一例であろう。ザイードによれば、「オリエンタリズム」とは、西欧がオリエンントを支配し、再構成し、威圧するための「様式」にはならない。(邦訳四ページ)すなわち、「オリエンタリズム」は、「東洋」と(しばしば)「西洋」とされるものとのあいだに設けられた存在論的・認識論的区別(邦訳三ページ)を前提とし、そのさい「西洋」がもつ諸価値を正として、それと対照的なあらゆる負の価値を「東洋」におわせる「思考様式」(邦訳三ページ)である。一八世紀以降、西欧の近代的学知によって精緻に築き上げられた「オリエント」像は、一見科学的真理であるかのような

体裁をとりながら、実はオリエントの合意なくして、西欧により、西欧近代社会の反対物として価値選択的に作り上げられたひとつの理念的構成物でしかない。にもかかわらず、「オリエンタリズム」は、西欧資本主義によるオリエントの植民地支配を正当化するイデオロギーとして機能し、ザイードによれば現在もなお、オリエントを見るわれわれの目を蒙らせつづけているのである。我が国でも、早くはインド史の小谷汪之氏が、『マルクスとアジア』（青木書店、一九七九年）および『共同体と近代』（青木書店、一九八一年）において、いわゆる「アジア的後進性」が歴史的根拠を持たぬことを実証している。その上で、このような後進性神話を見みだす世界史認識の構造、すなわち西欧式の歴史展開を「歴史的条件のさまざまに異なる、あらゆる民族の歴史に適用されるべき普遍的法則」（『共同体と近代』、一一五ページ）とみなし、西欧の世界史的優位性を盾として、西欧が第三世界で繰りひろげた破壊行為を「歴史的法則性」の名のもとに正当化する西欧中心史観がするどく批判されるのである。最近にいたっては、資本主義的世界システムの半周縁、周縁に着目しつつ近代史総体をとらえおおす著作が相次いで刊行されており、増谷氏の著作を含む『新しい世界史』シリーズ全一二巻（東京大学出版会）もまた、そのような意図のもとに企画・編集されたものといえよう。

これにたいして西欧の近代社会を内側から批判する試みは、近年の社会史的方法にたつ近代史研究により、近代市民社会の諸価値を歴史的に相対化する方向で進められた。すなわち内側

からの批判は、西欧の近代市民社会の負の部分に着目することにより、西欧市民社会の価値觀が、ほかなりぬ西欧においても、この負の部分を西欧内部のオリエントとしつつ価値選択的に逃びとられたひとつのイデオロギーでしないこと、にもかかわらず、この価値觀は普遍的正當性をもつものとして、そこからはずれるものにたいしては抑圧と切り棄ての機能を果たしたこと、を明らかにしようとするのである。ドイツ一八四八年革命研究についていえば、そのような「オリエント」のひとつは、西欧の市民社会的秩序を脅かす妖怪としての「プロレタリアート」であり、他のひとつは、西欧の進歩、発展を阻害するものとしての「西欧のなかの非西欧民族」である。一九世紀前半、ドイツ、オーストリアの諸都市に現れ、大衆的貧困化現象をもたらしたプロレタリアートとは、封閉的農村共同体の解体の結果、農村での生活基盤を失い、仕事を求めて都市へと流れ込んだ農民、あるいは都市内部では、生産、流通のシンドローム的編成体制の解体の結果零落した小商人、小生産者等、階級としてはなお無定形な下層労働貧民の群れであった。一般的にはブルジョア革命と規定される一八四八年革命は、彼らの飢餓を起爆剤とし、彼らの反乱のエネルギーを利用することによってはじめて推進される。だが、革命が進行する過程でやがてプロレタリアの要求が革命の前面に出るや、革命の課題は、いかにして既存の市民社会的秩序を守るか、に一変する。そして革命は、ブルジョア革命の枠組を堅持するために彼らを切り捨て、むしろ封建反動との妥協を選択したのである。また後者の非西欧民族

についていえば、ドイツ一八四八年革命はすぐれて「ドイツ」革命であり、たとえばスラブ人らの民族的諸要求は、ドイツの進歩にたいする「反革命」として抹殺されねばならなかつた。『新ライン新聞』紙上のエンゲルスが彼らを「歴史なき民」と断じたように、西欧の近代は、西欧のなかの非西欧民族の歴史的未来の否認の上に築かれたのである。この「プロレタリアーント」と「西欧のなかの非西欧民族」を西欧内部のオリエントとして位置づけ、その思想史的源泉をヘーゲル左派の「世界史構想」にまでさかのぼって明らかにした一八四八年革命研究として、我が国ではまず、故良知力氏の『向う岸からの世界史』(未來社、一九七八年)所収の諸論稿があげられなければならない。また同氏の遺著『青きドナウの亂痴氣』(平凡社、一九八五年)においては、プロレタリアとスラブ民族とが重なりあうヴィン一八四八年革命を舞台として、この両者の運命が共感をこめて描き出されている。

増谷氏の『ピラの中の革命』もまた、著者自身により、「ヨーロッパ近代の内在的批判の試み」(一四七ページ)と位置づけられている。一八四八年革命史研究としては、本書は、故良知氏の研究のうち、プロレタリアに関する社会史的研究の側面をふまえ、「日本におけるブルジョア革命とくにヨーロッパ近代に対する伝統的な見方の中では見落とされてきた、いわば『民衆の近代』の問題をウェーバー革命の中に探つてみると」、「第一の目標」(一四六ページ)とするものである。そのさい手がかりとされる資料は、著者がウェーバー滞在中に調査、

収集されたビラ、パンフレット、プラカード、民衆新聞等であり、この点だけからでも、本書は既存の諸研究の水準をはるかにしのぐものであるといえよう。民衆には「出来合の近代」の発想はない。彼らは自らの生活の片隅から発想し、そこから発音した(『読者へ』より)。著者はビラのなかに語られた民衆の「思いの丈」を読みとりつつ、当時の民衆が民衆自身の近代として、伝統的な近代革命の枠にはおさまりきらぬさまざまな方向性をうち出していたこと、現代の「出来合の近代」は、この民衆の近代と対決することによって自らの内実を決定し、民衆の近代を負の価値として抑圧することにより実現をみたものであること、を明らかにする。ここで著者のとりあげる民衆とは、職人、小商人、工場労働者、公共土木労働者であり、児童婦女であり、あるいは被差別民としてのユダヤ人である。以下で本書の内容に立ち入り、著者の課題がどのように展開されていくか見てみよう。

まず第一章のはじめにおいて著者は、当時のウェーバー市を市内区と市外区に分ける市壁に象徴的な意味をもたせ、市内区のブルジョア革命と市外区のいわば民衆革命という二本の柱をたてる。すなわち貴族、金持ち市民が住み、商業を中心とする市内区では、市民たちの要求はブルジョア革命の理念とほぼ一致した、帝國ないしウェーバー市の政治的、経済的な機構変革であったのにたいし、小市民的手工業者および労働者が住み、生産業を中心とする市外区では、民衆の運動は、日常生活上の不満と直接結びついて展開された、とされる。一八四八年三月一三

日に革命が勃発すると、まず市外区の民衆の襲撃対象となつたのは、食料品価格高騰の元凶とみなされた消費税の徵收所であり、彼らから仕事を奪う新型工場機械であった。市場では、農民と仲買人や消費者の中間にたつて商品価格を操っていたバス、「ナッシュマルクトの王様」が民衆の手で追放され、規定の目方以下の小さなパンを高く売りつけるパン屋や、秤をごまかし粗悪な肉を売る肉屋、強欲な家主にはシャリヴァリ（「労働者、下層民の、目に見える敵に対する民衆的制裁」、三六ページ）がしかけられる。市外区の民衆にとって普通選挙などという形式的平等よりも、生活上の実質的公平こそ問題であつたのである。第一章の三、「パン屋、肉屋の悲劇」、四、「社会問題とア革命の序」で述べられているように、パン屋、肉屋、家主は三位一体をなすウェーラン社会の実質的支配者であり、それゆえ彼らに対する民衆の抗議をつきつめてゆけば、革命はブルジョア革命の序をこえ、きわめて根底的な社会変革へと発展しうるものであつた、とされる。このように明らかに性格を異なる市内区の革命と市外区の革命という二つの柱のせめぎあい、前者による後者の抑圧過程を明らかにすること、これが本書のライト・モチーフとなる。そしてこのモチーフは、たとえば家賃問題をめぐる叙述のなかで、見事に生かされている。すなわち、はじめ家賃減不払い運動が手工業親方や商人たちによって主導されるあいだ、運動は市内区のブルジョア革命の枠内にとどまつていた。ところが運動が市外区の労働者や「プロレタリアート」に拡大して急進化し、共和制要求やアナーキーに発展し

かねね様相を示すやいなや、市内区の革命の態度は一変した。市内区の革命は、法的秩序や私有財産の神聖というブルジョア革命の論理をもつて民衆の運動の抑圧にのり出すか、あるいはたくみに問題をすりかえて、運動を別方向へとそらせてしまつたのである。

「労働問題の転換」と題される第二章では、著者は、市外区の民衆のうち、職人、熟練・不熟練工場労働者、公共土木労働者等、さまざまな階層の労働者に注目し、革命にたいする彼らの「思い入れ」、彼らの運動形態、組織をそれぞれに明らかにしてゆく。当時の労働者の存在形態はきわめて流動的であり、親方が工場労働者や失業者に転落することもまれではなかつた。彼らの運動も、労働のツンフト的再編成を主張するものから、社会革命へとつながる「労働の権利」を主張するものまでさまざまである。だがそれらの主張はいずれも、著者が強調するよう、彼らが置かれた地位から発想された、彼ら自身にとつての近代の模索であった。一般に一八四八年革命は、近代的労働運動の曙といわれる。だが、「出来合の近代」を規範として、当時の労働者をやがて資本主義社会のなかに組み込まれる存在とつかみ、彼らの運動の近代性、前近代性を評価するだけでは、西欧近代の内包する諸問題は見えてこない。安易な近代化論を排する著者は、ビラの中から、市内区の革命の論理ではつかめぬ市外区の民衆の近代の多様性を再現してみせ、前者によつて否定された「民衆の近代」の中にこそ、現代にまでつながるアクチュアルな課題を見い出すことができる、とす

るのである。

第三章では女性にとっての近代が扱われ、宗教問題を扱った第四章の四ではユダヤ人にとっての近代が扱われる。一八四八年革命期の女性問題について、ヨーロッパでは、近年、社会史的研究の隆盛と女性問題一般にたいする関心の高まりに促され、資料集や論文集、モノグラフィーが相次いで刊行されている。だが我が国では、故良知氏の「女が銃をとるまで」(『社会史研究』第一号、一九八二年)等を別とすれば、ほとんど研究史上の蓄積のない分野であるといつてよい。「女たちの革命」に一章をささげた著者は、ここでも、先に立てた市内区の革命と市外区の革命の対抗というモチーフによって問題の整理を試みる。だが、著者自身も認めるように、ここでは問題がきわめて錯綜しており、著者の立てた図式がむしろ「出来合の図式」として機能し、女性にとっての近代の意味を理解する上で障害になっているのではないか、という感想を持たざるをえない。著者によれば、市内区での女性問題は選挙権や婚姻における男女の平等であったのにたいし、市外区では、売春こそ当時の女性の悲惨な状況を映し出す最大の問題であった。そして売春は、第三章の一の「底辺を担つた女たち」で詳しく述べられているよう、女中や女工等、女性労働者の地位の不安定、低賃金の帰結である以上、市外区の女性問題は、労働者一般にとっての社会問題、労働問題と分かち難く結びつく。であるからこそ市外区の女性たちは、男性労働者と共に武器をとり、「民衆の近代」をなう。さらに市内区の一部の女性たちも、男性の優先する

市内区の革命に對抗して女性の解放を市外区の労働者との共闘のなかに見い出し、民衆の近代の共有者となつた。「女国民軍」に結集した女たちの士気は、革命の敗北が決定的となつて男たちが武器を捨てたのちもなお、きわめて高かつたといわれる。しかししながら、女性たちは、「民衆の近代」の担い手であると同時に、同じ「民衆」によって抑圧された存在でもある点が見落とされはならないであろう。すなわち女性は、市内区、市外区を問わず社会的に蔑視された存在、ザイードの表現を借りれば、社会のなかの「オリエント」なのである。それゆえ女性が自らの近代を模索しようとすれば、まず民衆の一員としては男性とともに市内区のブルジョア革命の論理に對抗するが、女性としては、共闘者である男性の心性に果食う女性差別とも対抗しなければならず、さらに男性に対抗するためには、自分自身のなかにひそむ女性差別からの自己解放をもやりとげねばならないのである。当時の資料を探索しても女性問題を論じたものは乏しく、まして女が女の立場から女の気持ちを語ったものとなると、ごく少數のインテリ女性の手記等を除き皆無に近い。そうした資料上の困難を承知の上ながら、これらの三点が押さえられてはじめて、当時の女性にとっての近代の意味と、現代にまでつながる課題とが見えてくるのではなかろうか。

女性についていえることはユダヤ人にも共通する。一八四八年革命期のユダヤ人問題もまた、我が国ではほとんど未開拓の分野であるが、著者には別稿「革命とアンティゼミティスム——ウイーン・一八四八年——」(『社会史研究』第五号、一九八四

年)があり、本書と合わせ読まれるべきであろう。周知のよう

にユダヤ人の解放は啓蒙思想によって準備され、フランス大革

命によって実現をみる。すなわちユダヤ人の解放は、宗教と政

治の分離、法の下での平等という、ブルジョア革命の論理の枠

内に属するものであった。しかし『社会史研究』の論文のなか

で詳しく述べられているように、ヴィーンのユダヤ人解放は市

内区の革命においても積極的支持を得られず、また旧い反ユダ

ヤ的偏見を持ったままの民衆は、その偏見を反革命に利用しよ

うとする市内区のアンティゼミティズムの宣伝にからめとられ

てゆく。ユダヤ人もまた、市内区、市外区を問わず、社会のな

かで差別された「オリエント」なのである。民衆の反ユダヤ的

偏見の強さに絶望したユダヤ人の一部は、自らの近代を西欧近

代からの脱出にとめた。だがシオニズムの歴史が示している

ように、西欧の外につくられたユダヤ人社会は、決してオリエ

ントには属さぬひとつの西欧近代社会であり、そのようなもの

として、周囲のオリエントの抑圧者となる。こうしてユダヤ人

の模索する近代は、二転、三転するのである。本書の枠からは

みだすことかもしれないが、女性やユダヤ人にとっての近代を

描こうとするならば、民衆の心性において性や民族の差異が差

別や排除に転換する構造、およびそのようにして排出された西

欧内部の「オリエント」の社会的機能について、思想史的観点

から考察が必要かと思われる。

以上、本書の内容を概観したうえで、西欧の近代を内在的に

批判する、といふ著者の課題にたちかえてみると、たしかに

市内区の市民の対立項としての市外区の民衆は、總体としてブルジョア革命の限界を告発し、市民にたちによって選びとられて西欧近代の諸価値を歴史的に相対化せずにはおかない。だが、著者のいう「民衆の近代」を女性やユダヤ人の視点からとらえなおしてみると、市民対民衆という二項対立が近代批判としてどこまで有効か、という問題が生じてくる。西欧の近代を内在的に批判するためには、民衆の近代そのものをさらに重層化して批判してゆかねばならないであろう。

最後に、本書のニークな点のひとつとして、第四章において、われわれ日本人にはなじみの薄い宗教問題が比較的ていねいに論じられていることを指摘しておこう。ユダヤ人問題や「オリエンタリズム」の問題にもつうじることであるが、著者は別稿「飛び越えられた近代または教皇のドイツ語」(『歴史学研究』第五六三号、一九八七年)のなかで、民衆における宗教問題、あるいは宗教的偏見の複雑さに触れた体験を次のように紹介している。著者のヴィーン滞在中、一九八三年は、ヴィーンが一六八三年のトルコ軍包囲から解放されてちょうど三〇〇〇年の年にあたっていた。そこで市では、「異教徒に対するキリスト教軍の勝利」を記念する各種の催しが開催され、おりしもヴィーンを訪問したローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、三〇〇〇年前キリスト教軍が出撃を前にしてミサを受けたゆかりの教会で、「キリスト教ヨーロッパ」の不滅を神に感謝するミサをあげたのだという。現在ヴィーンで底辺的労働に従事する多くのトルコ人移民労働者は、これらの行事を一体どのようないで

見たのだろうか。われわれの知るヨーロッパの近代においては、人々は合理的思考を身につけ、宗教的偏見を払拭したとされる。だがそれは表面的なものにすぎず、現在もなお、国民の大部分によつて、何の痛みも反省もなく、オリエントに対するキリスト教ヨーロッパの勝利とその不滅が祝われる有様に、著者はすつかり考えこまれた、というのである。話を一八四八年のウイーンにもどせば、市内区では、リグオリ派の追放が、旧権力と癒着した教会勢力に対する革命的理念の勝利とされ、市外区では、反ローマ的「ドイツ・カトリシズム」の運動が民衆をとらえる。だが、市内区の運動はもとより、「ドイツ・カトリシズム」の運動も、民衆の生活問題と触れ合わぬ理念的なものに

とどまつたかぎりでやがて民衆から離れたとされる。とするならば、本書で論じられている宗教問題は、著者の圖式でいう市外区の革命、あるいは「民衆の近代」という枠の外で動いていふことにならないだろうか。民衆の近代における宗教問題を論じようとするならば、ここでも問題は、市外区と市内区の対立といふよりも、著者が「飛び越えられた近代」のなかで述べておられるように、民衆自身の宗教的世界を内在的にさぐることではないだろうか。ヨーロッパを理解する上で不可欠な民衆におけるキリスト教の問題は、ひらく近代史研究の課題のひとつでもあろう。

(一橋大学助手)